立原道造と『新古今和歌集』

毛利友美

一

四季派の詩人立原道造は、詩人と建築家の二つの顔を持っていた。また、それ以外に大変な読書家であり、外国文学、日本文学、古典文学もよく読んでいた。特に『新古今集』を、その中でも藤原定家に深い関心を示し、そこから創作のインスピレーションを多く得ていた。そこで立原の文学活動に大きな影響を与えた『新古今集』との関係について考えていこうと思う。

立原が『新古今集』への傾倒をはっきり示す最初の資料として現れてくるものが、次の書簡である。

近頃僕がよみだして、感激してゐる、「花伝書」「申楽談義」「能作書」をあげよう。僕は中世にずゐぶん食欲を感じてゐるんだ。この能の理論からさかのぼつて、定家の歌論に行かうと思つてゐる。「新古今集」がいちばん勉強したいんだ。（略）夏休みに、よみたい本は何かあるかしら。考へてみると何もなくなつてしまう。

先刻もいつたやうに、「新古今集」と定家の勉強（注1）。

ここからもわかるように、立原の視点がすでに能楽論から歌論にまで及んでおり、単なる読書の一冊以上の意味を『新古今集』に見ていたと思われる。

続く二通の書簡は立原が『新古今集』をどのように捉えていたかが記されている。

☆この頃、万葉をよんでゐる。天平白鳳のすぐれた古典を持つ日本に感謝す。この土に生ひ育つた新古今の精神こそ近代西洋の文明に比すること出来るよきものであろう（注2）。

よんでゐるのは、藤原定家歌集。（秋の夜のかがみと見ゆる月かげは昔の空をうつすなりけり。）（いまぞ思ふいかなる月日ふじのねのみねに煙の立ち初めけむ。）これが万葉の歌より、いまの僕の心に近いといへば、それは僕の心がかげ日向多く、うつくしきもの念ふことしきりだといふのだらう。万葉集とは童謡のごとく面白いが、何だか身近ではない（注3）。

この二通から、立原は『新古今集』だけでなく『万葉集』についても触れ、その上で『新古今集』に引かれていることを述べ、その理由を「区別などいふ分類は頭でするな。感ぜよ。するとぼんやりわかるのだよ（注4）」としている。これは論理的な理由等ではなく、「感じる」という非常に主観的な理由付けであるが、おそらくこれこそ立原には最大の理由となっているのである。

これら三通の書簡から伊吹知子は論文「立原道造と新古今集」（注5）の中で、立原が『新古今集』から影響を受けたのは昭和十年、立原二十二歳の時を境として考えて良いと述べている。

また立原の最晩年に親交があった小山正孝の回想によると、昭和十三年の秋、立原を訪ねた折に言われた言葉として、

「定家歌集をお読みなさい」「新古今和歌集を読むと、僕にはたくさんの詩ができる」逢はざる恋、忍ぶ恋、逢ひて逢はざる恋など、題の面白さについて言つた（注6）。

があり、恋題ばかり特に叶わない恋題に触れている。更に昭和十三年の秋といえば、立原の死の半年ほど前であり、立原の『新古今集』への思い入れは最後まで失われることはなかったと思われる。

これほど立原の中に深く徹底した『新古今集』への傾倒振りは、当時の立原の周囲を取り巻く状況に因るところが大きいと考えられるが、立原の本格的な創作活動の出発点が、短歌制作であったことも、一つの重要な要因になっていると考えられる。

立原の作歌活動は昭和二年、府立第三中学校に入学してから始まるが、昭和四年九月には、国語教師、橘宗利を介して北原白秋を訪ねている。この北原白秋はその後やはり昭和十年に「多麿短歌会」を設立し、機関紙『多麿』を創刊する。その中で北原白秋は『多麿綱領』と題し、新古今調を主張する。このような北原白秋との出会いが、立原に『新古今集』への思いを促す役割を果たす一番初めの大きなきっかけになっているのである。

	立原道造年譜	詩歌・評論	学界	雑誌
1927年（昭和2年）	府立第三中学校入学 十四歳		久松潜一『上代日本文学の研究』	
1928年（昭和3年）				
1929年（昭和4年）	「学友会誌」に短歌を掲載北原白秋を訪ねる		佐々木信綱『新古今和歌集』	
1931年（昭和6年）	第一高等学校に入学十六歳 松永茂雄と出会う 「校友会雑誌」に物語「あひみてののちの」を発表	萩原朔太郎「恋愛名歌集」	佐々木信綱『藤原定家歌集』	
1935年（昭和10年）	「ユメミコ会」に参加	北原白秋「多麿短歌会」	岡崎義恵『日本文芸学』	「多麿」創刊 「日本浪曼派」創刊 「ゆめみこ」創刊

このように比較的早い時期から創作活動と平行するように『新古今集』は立原の側に存在していたのである。続いて立原に『新古今集』への新たな指針を示したのが、第一高等学校で出会った松永茂雄である。立原は昭和十年に松永が主宰した「ユメミコ会」に参加し、雑誌「ゆめみこ」に作品を寄せる。

立原はこの「ユメミコ会」に参加することにより和歌の勉強から研究へと手を広げることになる。次に挙げるのは立原の『新古今集』の現代語訳である。

32　　謙徳公

水脈ひかず　水禽一羽　寒い水の上
私は　おもつてゐる
来ない　たよりを――

たよりは　来ない　今日も昨日も　（『全集』第四巻・四一七）

これは

たびたび返ごとせぬ女に

水のうへにうきたるとりの跡もなくおぼつかなさをおもうころかな　（新古今集・恋歌一・一〇二一・謙徳公）

を現代語訳したものである。

65　　よみ人しらず

なぜおまへは乾いてゐないのか　時雨ふる
冬の　木の葉よ
なぜ乾いてゐないのか　つめたい頬
頬をつたつて　だれも知らない涙よ　（『全集』第四巻・四一八）

これも

題しらず

時雨ふる冬のこのはのかはかずぞものおもふ人の袖はありける　（新古今集・恋歌一・一〇五四・よみ人しらず）

を訳したものである。このような試みが為されるようになったのには、松永の力が大きかったようである。

この松永と同時期に萩原朔太郎が『新古今集』と『万葉集』に触れている。朔太郎は『新古今集』の音楽至上主義について述べているが、この点は立原の詩の音楽性に影響を与えていると思われる。

また先に述べたように立原は建築家でもあるのだが、その建築を学んでいく中で、建築学、美学的立場から、立原の中世への志向に影響を与えた人物がいる。昭和九年から立原は東京帝国大学の学生であったが、そこで美学の教授であった大西克礼が立原に影響を与えたのである。大西はその活動の前半期には主にドイツ語圏の美学理論について研究していたが、後半期には独自の美学体系の構築を目指し、「幽玄・あはれ・さび」といった日本の伝統的美学理念の研究を進め、昭和十四年には『幽玄とあはれ』を発表した。当然立原もこの大西の講義を受けたはずであり、

大西克礼のノオトをうつし、（略）このごろ、僕は美学者になつて来たよ術語をかなりおぼえた（注7）。

の記述や、また卒業論文「方法論」の参考文献の中にも大西の著作があることからも、大西の研究から学ぶ点は多かったと考えられる。

当時は国文学の方からも日本の美の伝統に目を向けることが活発になっていた時期であった。久松潜一は昭和二年『上代日本文学の研究』

を、岡崎義恵は昭和十年『日本文芸学』、昭和十三年に『日本文芸の様式』、風巻景次郎は昭和十一年『新古今時代』をそれぞれ発表し、日本の美の伝統に目を向ける流れを作っていた。特に風巻景次郎の『新古今集』の研究は松永茂雄を通して立原にも影響が及び、立原の詩の創作の中に自然と受け入れられたと思われる。

	立原道造年譜	詩歌・評論	学界	雑誌
1927年（昭和2年）	府立第三中学校入学 十四歳			
1928年（昭和3年）				
1929年（昭和4年）	「学友会誌」に短歌を掲載北原白秋を訪ねる		佐々木信綱『新古今和歌集』	
1930年（昭和5年）		堀辰雄『聖家族』		
1931年（昭和6年）	第一高等学校に入学 十六歳 松永茂雄と出会う「校友会雑誌」に物語「あひみてののちの」を発表	萩原朔太郎「恋愛名歌集」	佐々木信綱『藤原定家歌集』	
1932年（昭和7年）	一高短歌会に出席	川田順『新古今集の鑑賞』	石田吉貞『新古今和歌集（上）』 潮田鉄雄『新古今和歌選釈（上）』	「コギト」創刊
1933年（昭和8年）	堀辰雄を訪問		潮田鉄雄『新古今和歌集評釈（下）』	「四季」創刊 「文学界」創刊
1934年（昭和9年）	東京帝国大学工学部建築学科入学 十八歳 「四季」に詩を発表	中原中也『山羊の歌』	石田吉貞『新古今和歌集注釈（下）』	
1935年（昭和10年）	「ユメミコ会」に参加	北原白秋「多磨短歌会」		「多磨」創刊 「日本浪漫派」創刊 「ゆめみこ」創刊

	立原道造年譜	詩歌・評論	学界	雑誌
1936年（昭和11年）		萩原朔太郎「新古今集への歌壇的潮流とその批判」「万葉と新古今」	風巻景次郎『新古今時代』	
1937年（昭和12年）	石本建築事務所に入所 『萱草に寄す』を出版 『暁と夕の詩』を出版	堀辰雄「かげろふの日記」 保田与重郎「和泉式部私抄」	北原白秋・折口信夫『実朝・良経集読本』	
1938年（昭和13年）			岡崎義恵『日本文芸の様式』 萩原朔太郎『日本への回帰』	
1939年（昭和14年）	二月中原中也賞受賞 三月死亡 二六歳	保田与重郎「後鳥羽院」 北原白秋『夢殿』	大西克礼『幽玄とあはれ』	「文芸文化」創刊

また、佐佐木信綱による『新古今和歌集』と『藤原定家歌集』が相次いで刊行され、立原もこれを読んでいた。

さらに立原が生きた時代と新古今時代との共通性にも関係があると思われる。

	立原道造年譜	一般事項
1914年（大正3年）	一歳	第一次世界大戦
1918年（大正7年）	五歳	第一次世界大戦終結
1921年（大正10年）	八歳	プロレタリア文学運動起こる
1923年（大正12年）	十歳	関東大震災
1925年（大正14年）	十二歳	治安維持法公布
1929年（昭和4年）	十四歳	世界恐慌
1931年（昭和6年）	十八歳	満洲事変
1939年（昭和14年）	二六歳	第二次世界大戦始まる

しかし先の大西克礼らを含めた一種の伝統回帰・日本回帰ともいうべき現象を安易に当時の国粋主義的傾向の表れとするのはどうであろうか。立原も一時は保田与重郎らの「コギト」に接近するものの、次第に距離を置くようになる。そして最終的には立原は生きている時代からも距離を置くようになり、時代から一歩引いて客観的に見る位置に至ったと思われる。これはちょうど新古今時代の歌人、藤原定家と同じ姿勢であり、自らの事でさえ遠くから眺めているような、第三者の目で見るような見方を獲得した。

二

『新古今集』の影響がはっきりと作品に現れているものとしては六作品が数えられる。そのうち定家の歌を引用しているものが、四作品ある。ここでは二作品について触れていく。

またある夜に

初雁のとわたる風のたよりにもあらぬ
おもひをたれにつたへむ――定家歌集

私らはたたずむであらう　霧のなかに
霧は山に沖にながれ　月のおもを
投箭のやうにかすめ　私らをつつむであらう
灰の帳のやうに

私らは別れるであらう　知ることもなしに
知られることもなく　あの出会った
雲のやうに　私らは忘れるであらう
水脈のやうに

その道は銀の道　私らは行くであらう
ひとりはなれ……　（ひとりはひとりを
夕ぐれになぜ待つことをおぼえたか）

私らは二たび逢はぬであらう　昔おもふ
月のかがみはあのよるをうつしてゐると
私らはただそれをくりかへすであらう

（『全集』第一巻・十八・十七）

この作品は昭和十年に発表されたものである。ここでは詞書を含め、定家の三首の歌が引用されている。詞書には、

はつかりのとわたる風のたよりにもあらぬ思ひをたれにつたへん

（拾遺愚草・一三七三）

第三連には、

西行法師、人人に百首歌よませ侍りけるに
あぢきなくつらきあらしのこゑもうしなどゆふぐれにまちならひ

けん　（新古今集・恋歌三・一一九六、拾遺愚草・一六八）

第四連には、

秋の夜のかがみとみゆる月影はむかしの空をうつすなりけり

（拾遺愚草・三八）

がそれぞれ引用されている。

先の書簡の中に見られたように立原は藤原定家の歌論と歌とを学ぶ姿勢を表明していたが、ここにその成果が見られる。定家は本歌取りの手法について「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」（毎月抄）(注8)としていたが、この立原の詩は本歌となる三首の言葉を引くとともに、「私らはたたずむであらう　霧のなかに」や「その道は銀の道」といった言葉を使うことにより近代的な詩となっている。しかしこの根底には実らない恋の、孤独感・寂寥感が本歌と共通するように流れているのである。が、立原の詩には、その孤独感や寂寥感を、当然のこととして受け入れている姿勢が見られ、また「私ら」の言葉によって個の表現が複数形に変えられている。この点が本歌取りの「新しき心」になっていると思われる。

次の「夜に詠める歌」という散文詩に付けられている「反歌」と題された作品にも詞書としての引用歌がある。

夜に詠める歌

夜だ、すべてがやすんでゐる、ひとつのあかりの下に、湯沸しをうたはせてゐる炭火のほとりに――そのとき、不幸な「瞬間の追憶」すらが、かぎりない慰めである。耳のなかでながくつづく木精のやうに、心のなかで、おそろしいまでに結晶した「あの瞬間」が、しかし任意の「あの瞬間」が、ありありとかへつて来る。あのとき、むしろ憎しみにかがやいた大気のなかで、ひとつの歌のしらべが熱い涙に濡らされてゐた、そして限りない愛が、叫ぶやうに、呼んでゐた、感謝を、理解を。……私は身を横たへる。私は決意する、おそれとおどろきとおののきにみちた期待で――日常の、消えてゆく動作に、微笑に、身をささげよう、と。さやうなら、危機にすらメエルヘンを強ひられた心！　さようなら、私よ、見知らない友よ！……私は、出発する。限りのある土地に、私は、すべての人のとほつた道を、いそがう。人はどれだけ土地がいるか。身を以て――。夜だ、すべてがやすんでゐる。やがて燈が消される。部屋がとほくから異つた装ひをして訪れる。私の身体はもう何も質問しない。恩寵も奇蹟も、ひそかなおしやべりもなしに。眠りと死とのにほひが、かすかに汚れたおもひをひろげはじめる。夢みる、愛する、そして旅する。それは幻想だらうか、さうであつてくれればいい、私が、鳥の翼と空気との間に張られた一枚のあの膜のやうに、不確かなやぶれやすい存在であるとは。誰が私に言ひ得ようか、物体は消え去ることがないといふ保証を――。それは嘗てメタフイジイクの幻想だつた、ここを過ぎて、私はまた何をねがふのだらうか。私はし

づかに死ぬ。そして死んでゐる。葦のやうになつた耳を立て、限りない愛に眼ざめる。すでにふたたび、裏切られもしないで、裏切りもしないで……。闇のなかでは、かすかな希望や物質が微妙な影をうすく光らせる。夜だ、すべてがやすんでゐる。さうだ、だれが眼ざめてゐよう、私もまた、もう眠られなくなつた星ばかり、外の空に溢れてゐるだらう！　見られずに、信じられずに——。ただ答へるのは、かくされた泉ばかりだらう。すべてがやすんでゐる。私もまた、夜だ。眠りにひたされて、遺された子守唄！　そしてすべてが失われてゆくだらう、やすみながら。闇に、つくりもせずつくられもしない闇に、そして光に、かへつてゆくだらう。夜だ！……

（『全集』第一巻・二四二～二四四）

反歌

かへるさのものとやひとのながむらん
待つ夜ながらのありあけの月——定家

光に耐へないで
ほろんで行つた　草木らが
どうして　美しい
ことがあらう

昼を私らの手にかへす
つめたいありあけの光のなかで
私が　どうして
否定しよう

鳥よ　鳥らの唄を天にかへせ
花よ　花らの光を野にかへせ
——たたへられた　水に

夜が去る　その最後に
影よ　ちひさい波のさざめきを
のこせ！　あこがれられた瞳に

（『全集』第一巻・二四四・二四五）

詞書にある歌は、

かへるさのものとや人のながむらんまつ夜ながらの有明の月

（新古今集・恋歌三・一二〇六・定家朝臣）

である。この歌を解釈すると（あの人は帰り道のものとして見ているでしょう。私があの人を待ち明かして眺めているこの有明の月を）となり、物語的な場面が喚起される。定家にはこのような物語的な視点、私でもあの人でもない、つまり当事者でない第三者の目で歌を作っているような姿勢が見受けられる。一方、立原の「反歌」には自然の変化、うつろいを冷静に見つめている瞳が存在している。すべてを見届ける瞳、この瞳が第三者の目ではないだろうか。そしてこの第三者

の目こそ『新古今集』を読むことから始まり、現代語訳、本歌取り、と進んでいった立原の『新古今集』特に定家からの影響の一つの大きなものではなかっただろうか。

三

立原の『新古今集』享受について、中村眞一郎は、『現代日本文学大系』立原道造の項ににおいて、立原の作詩の方法は新古今時代の歌人たちに似ていると指摘している。それを要約すると次のようになる。

彼の仕事は、パスカルの言う「幾何学的精神」と「繊細の精神」との見事に協力したものだった。その詩句の取扱いにおいては職人的な正確さを意図して、何度も推敲を重ねていて、曖昧さや偶然の成功を狙わなかったと思う。

彼は詩趣や詩想の点では天性の詩人であったが、詩作の仕事上は完全な意識的技巧家だった。

その徹底した作詩至上主義は、新古今の歌人たちに似ていた。彼らは与えられた題目に従って、つまり注文に応じて技巧的な詩を作った。その代表格が「本歌取り」であり、それによって先人と自分の詩境の間に和音を鳴らそうとした。

立原も同じように技巧を用いていた（注9）。

と評している。前節でも述べたとおり、新古今歌人の「本歌取り」の技法を立原も用いたが、それを「先人と自分の詩境の間に和音を鳴らそうとした」という指摘は立原の詩作の本質を突いた発言である。

立原の古典享受は、あくまでも詩の方法の一つとして行われている。しかしそれは立原が求めて行ったことの当然の帰結であった。先に述べたように、立原の創作活動は短歌から始まり、北原白秋、松永茂雄との出会いによって『新古今集』に傾倒して行く。さらに当時の文壇、学会での『新古今集』への伝統回帰があり、大学での美学の講義においての大西克礼の影響等と、立原の創作活動の基盤となるものがこのような過程を辿って形成されていったことも重要なことであるだろう。そして立原が体得した詩の方法は、まず古典を読むという基本的なところから出発した。本歌取りという技巧を取り入れたことは当然のことではなかっただろうか。立原の『新古今集』から影響は、立原が求めた詩法や、詩精神が必然的にもたらしたものであり、必然性がある。詩法については、定家の「詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め」の精神に従い、本歌取りを積極的に行っている。詩の中に歌を引くことで、立原自身の叙情と、『新古今集』の叙情とが美しい和音を奏でている。また立原の作品からは、戦争に突入した昭和十年代の混乱した時代を感じさせないが、それは立原が意識して行ったことであった。時代を意識していたからこそ作品を現実の世界から切り離し、仮想の世界で創作していたのである。だからこそ、『新古今集』の作られた時代、中世に引かれたのであろう。その引かれる理由を立原は次のように示している。

暗黒時代なんていはれるくせに、僕は、あの時代すべての芸術

に触れるたび　はげしいよろこびをおぼえる（注10）。

この時代性については、昭和十一年に萩原朔太郎が次のように述べている。

新古今集の詩精神には、偶然にもまた現代の日本の社会と、一部よく接触したものがある。（略）

新古今集の時代は、暗いニヒリズムの時代であつた（注11）。

立原は表現の型を尊重した。このことは、立原が『能作書』等の能論を愛読していることにもつながるのであるが、立原は、和歌という形式の延長線上で、自分の創作を試みたのである。しかし伝統の型をそのまま受け継ぐのではなく、そこにはやはり、近代詩人としての立原らしさが表現されている。立原らしい詩の形式に落ち着いたのである。伝統を意識しつつ詩という形式を用いての創作は立原にとっては特別なことではなかったのである。

※　詩の引用は『立原道造全集』全六巻（角川書店）、和歌の引用は『新編国歌大観』を用いた。

注1　『全集』第五巻　書簡番号一〇三　昭和十年六月十日　生田勉宛

2　『全集』第五巻　書簡番号一五七　昭和十年九月十三日　柴岡亥佐雄宛

3　『全集』第五巻　書簡番号一六一　昭和十年九月十五日　小場晴夫宛

4　注1に同じ

5　伊吹知子「立原道造と新古今集」山田俊幸編『論集・立原道造』昭和五十八年一月　風信社

6　小山正孝「立原道造の背後にあるもの」『国文学』昭和四十七年十月号　学燈社

7　『全集』第五巻　書簡番号二六四　昭和十一年七月二十三日　小場晴夫宛

8　橋本不美男、有吉保、藤平春男校注・訳『歌論集』日本古典文学全集五十　昭和五十年四月　小学館

9　『金子光晴　高橋新吉　中原中也　小熊秀雄　萩原朔太郎　立原道造　北川冬彦　山之口獏　草野心平　小野十三郎　伊藤静雄　村野四郎集』現代日本文学大系六七　昭和四十八年七月　筑摩書房

10　注1に同じ

11　『萩原朔太郎全集』第十巻　昭和五十四年九月　筑摩書房

（もうり　ともみ／平成十一年度博士前期課程修了）